

「大相撲力士名鑑」

(共同通信社)

東京に旧両国国技館が開館した一九〇九年から現在までの幕内全力士のプロフィールを収録し、毎年末に改定とも刊行される。内容はしこ名、最高位、本名、生年月日、没年月日、出身地、所属部屋、初土俵場所、十両昇進、入幕場所、最終場所、幕内在位場所数、幕内成績、身長、体重、得意手とかなり詳しい。力士が化粧まわしを着けた写真や解説文まで付き、さすが国技と感心させられる。

データを時代ごとに比べると、力士像がつかめる。主に一九六〇年代に活躍した優勝三十二回の大横綱、大鵬の身長は一八七センチ。大型化が進む近年の力士に見劣りしない。七〇年代に外国人初の幕内優勝を果たした高見山は一九二センチもあり、今の横綱、照ノ富士と同じだった。

巻末には歴代横綱、優勝・三賞力士、昭和・平成・令和十両力士の各一覧など十四項目の興味深い「資料編」がある。出身地別幕内力士一覧を見れば、幕内力士を最も多く輩出したのは青森県、次いで北海道。郷土力士を索引で調べ、活躍ぶりや人物像を知るのも楽しい。(薄葉 茂)



西加奈子著 『くもをさがす』

(河出書房新社)

『サラバ!』で直木賞を受賞した西加奈子の初のノンフィクション。カナダのバンクーバーに語学留学中の2021年、乳癌発覚折しもコロナ禍、日本に帰ることをあきらめカナダで手術と療養したドキュメント。かの地の医療体制やそのケア方法など事細かに描写。愕くことに両乳房全摘、リンパ3本切除の手術が日帰りなのだ。医師を始め医療関係者とのやり取りは無論英語だったはずだが、そこはストーリーテラーの西加奈子だ。看護師達のカジュアルな対応を関西弁の会話とし、臨場感たっぷりとその雰囲気伝わってくる。手術前の抗癌剤治療、手術後の放射線治療の過酷な半年間、Meal Trainのシステムにより毎日友人たちが順番にご飯を届けてくれたこと。癌罹患により心身共にきざす苦悩の中にも、明るい光が差す事柄をもとめる行動力。それと共に、さまざまな思索を深めつつ治療してゆく姿に感嘆の思いで引き込まれた。まだ読んでない方はぜひ手にとり、魅力的な本の題名「くもをさがす」の意味も考察してみてください。(宮本君子)

